

能証の「法」との融合、体験、正観を表示したものである。吉藏は「初め正覚を成じ、寂滅道場にして諸菩薩の爲に雙べて二義を明す……今の一乗は真実となすと明し……今の身を真実なりと辯ず。謂く雙開なり。然るに乗と身とは更に二体なく即ち一の正観を宜しきに随つて之を説くのみ」と序文に述べてゐる

無作三身の根本批判

本佛の根本開顯

河 合 陟 明

宇宙本体は二つ在つて存すと云ふべきが如くである。然乍ら本体は一なるべし。宛もデカルトに於て神の本体と物心の一本体との二つが、スピノザに依て一本体としての神に歸決するが如し。さらばスピノザ乃至東西古今の本体は果して神なりや。カントも批評する如く西洋古今の本体は神に非ず。加之彼は遂に物自体を以て神とせり。吾東洋に於る印度哲学等の Brahman 亦同様なり。然るに仏教に於ても、此誤を犯せる者が無作三身の本仏なり。而も其れを無始無終の本仏となす。あゝ迷源の如何に甚しきか。これ人文古今の大問題なり。さらば本体とは何ぞや、是れ実相・真如・法身に過ぎず。未だ断じて神に非るな

が、見宝塔品は正しく仏成道の正観、人法相依の融合を「二仏並座」で表はしたものである。更に吉藏は「但し乘に二種あり一には所乗の法二には能乗の人なり、能乗と所乗とを具して一乗の義始めて円なり」と。この見宝塔品は正しく円の一乗を表示したものである。

り。私は之を「理本覚」と云ひ性悪法門と云ひ、「神の guardians」となす。実相の根拠に立つて法華經洞觀するに、一代の綱骨は記小と久成である。二乗作仏せずんば菩薩も成仏せず、乃至一切凡て成佛せず、仏陀も亦権者の神變のみ。一切は虚妄戲論に終る。然るに若し真に覺るや十界の全体を一挙に統覚するものであつて、茲に三乗の涅槃の眞理性と實在性とが保証せらるゝものでなければならぬ。これ空間論に於ける涅槃の普遍妥当的、必然的なる實在性を説くものである。然乍ら更に最も大事なるものは実に時間論に於ける問題である。久成論は即ち是なり。今二乗を含む十界の一切が大乗の覺を得るとするも、その覺の内容が十界の一切を含む超越的絶対者としての「理」であつて、事としての客觀的現実でないならば如何であるか。蓋し「事」とは、吾人の知つてゐる經驗は實在界の全部ではないが、經驗を因果の原理で押し拵げた客觀的世界を事と稱するのである。然るに若し單に理であるならばそこに理の一念三千が成立するのみで事の一念三千は成立せぬ。然し因果の理なるものと、そ東洋哲学

特に仏教の独壇場であつて、西洋哲学には存しない。その然る所以は彼は個体生命の不滅を論ぜず。更に一層進んでその然る所以は実に宇宙本体を以て神となすに依る。彼等は更に十界事常という個体生命の实在を知らず。さて今久成論に就て綱要二門あり。一は先づ始覚・本覚の關係なり。凡て佛陀は必ず因果の理を經ざるべからず。因果なくしては何等の佛陀なし。然るに佛陀の覚か覺つた時以後の事の十界を體驗するというならば、それは單に始覚のみ。即ち大乘起信論の真如本覚を始覚するならば、苟しくも本覚を論ずる者皆之を知れり。然るに從來の佛教史上の本覚論皆誤れり。されば佛陀の覺に於ける時間上の有始と無始とこそ、佛教史上の最大Autonomyとして西洋哲学には全く無し。今之を如何に解決すべきか。茲に實に佛陀の覺を以て宇宙本体とも稱すべき最後の理由在つて存す。其れは實に認識論上最後の元一的統一なり。云く佛陀の覺とは覺つた時以前の現実界に遡つて無始以來の事の十界の有様即ち全法界の全体を體驗することを以て「事本覚」といふ也。これ法華經壽量品のみの独顯なり。もし始覚のみで事本覚のない述門に従うならば、自分の覺つて後の十界の實在性は一往保証せらるゝも、自分の覺る前の現実界を知ることを得ない以上、この覺つてから後の十界の現実も結局眞実の實在性を得ず。かくて先に覺つた人の實在界と後に覺つた人の實在界とは、それ丈違つたものになり、二乗不作仏の場合と同様な不都合を生ずる。天台の仏陀

觀・法界觀も全く同様なり。凡そ主觀なくして客觀なし。認識なくして實在なし。されば本覚の思想が眞実の實在觀にとつて必須不可缺なること言迄もなく、本有の實在と本覚の認識とは相俟つて全し。さて、第二の大綱はこの本覚を覺する始覚者が無始實在でなければならぬ。かくて始めて無始事常住の仏法界が成立ち、其れを一個体にして同時に遍法界たる佛陀に體現する處に本仏生じ、釈尊は即ち是なり。之れ「神のGhifakt」也「事の無作三身」ことに始めて正し。

是を以生顯具の理で表す時そこに本門の事の一念三千が成立する。即ち仏が有始の始覺に即して無始「仏界緣起の真相」を本覚すというは、無始以來の真相を己心の中に含んでいなければならぬ、と同じく、衆生も亦己心一念の陰妄中に無始の仏知見を備え、その内容として無始以來の十法界を、而も已顯の客觀的。現實的なる事の十法界を、本具していなければならぬ。故に一念の陰妄心は一瞬の中にも無始無終の大現實界を包有するといふ意味に於て、全く超時間的生命であり又は超時間的精神びなければならぬ。(ヘーゲル・西田哲學等の西洋には全く此理なし。)是を法身・真如・真相、乃至、九識心王という。衆生成仏の時はこの無始の仏界を覺り無始の九界を覺るを「本果と本因」との俱時感得といふ也。茲に始めて報身應身が成立す。開目鈔に之を示す。然るに尙この本仏釈尊を我が一念の中に藏し、己心の述語たることを「觀心本尊」といふ也。本果なく即ち本尊なくしては日蓮教學という仏教觀中最高大本因なく、且實に觀心も成立せざることを知るべし。(完)